

# 波間の休息

老老介護問題の緩和となる建築アプローチ

弓場 教行 環境・プロダクトデザインコース 藤田研究室

## 製作背景

日本は2007年から超高齢社会に突入しており、今後さらなる高齢化が進んでいくことから、日本の介護福祉業界では老老介護が問題とされている。老老介護とは、65歳以上の高齢者が同じく65歳以上の高齢者を介護することを指す。身体的・精神的な負担が大きい介護を高齢者が担うのは好ましくなく、認知介護<sup>1)</sup>や共倒れ、虐待などの重大な問題に発展する危険性がある。

## 計画敷地の概要

敷地は、和歌山県西牟婁郡白浜町の銀座通りを含む道路に沿った場所である。観光資源が豊富な町であるが、その一方で老年人口割合<sup>2)</sup>は増加しており、全国平均と比較しても10%以上高い。(図1)

	白浜町	和歌山市	和歌山県	全国平均
観光客総数(千人)	3,595	6,424	33,399	40,436
宿泊客数(千人)	2,092	838	5,686	4,300
年少人口割合(%)	10.6	12.3	12.1	12.6
生産年齢人口割合(%)	52.4	58.5	57.0	60.7
老年人口割合(%)	37.0	29.3	30.9	26.6

図1 平成27年 観光客数と年齢別人口割合の比較

計画地の南北には住宅街が、東西には浜と湾がある。道路は山に挟まれており、計画敷地自体もゆるやかな傾斜を含む。道路の道幅は狭く歩道もないので、高齢者が安心して歩けるスペースが必要である。

## ソフト的アプローチ

介護者の負担を減らすために、労働とレスパイトケアが必要だと考えた。労働は、従業員同士の人的ネットワークを構築できる。レスパイトケアとは、デイサービスなどの介護サービスを利用し、介護者が休息できる時間をつくることを指す。このふたつを合わせて、「ワーキングレスパイトケア」をソフト的アプローチの鍵とする。ワーキングレスパイトケアでは、介護者は介護アシスタントとして働き、その間つききりの介護から離れることができる。また、介護スキルの向上と経済支援のほかに、孤独な介護から遠ざける。

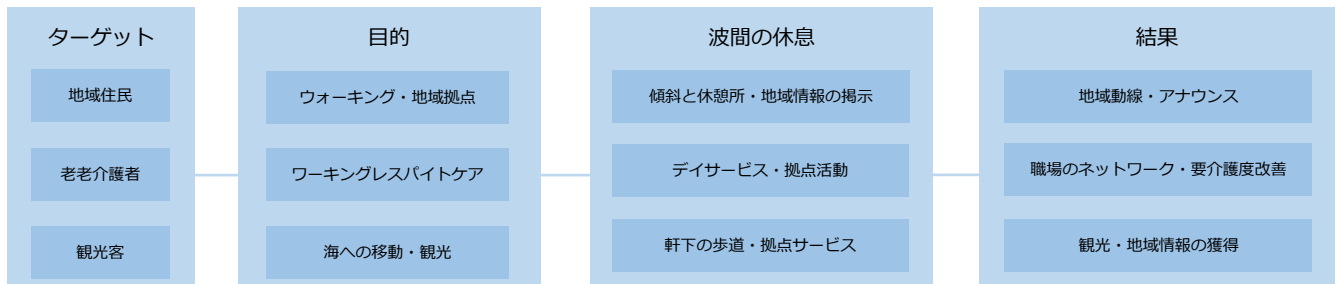


図2 ダイアグラム

注

1) 認知症患者が認知症患者を介護すること。要介護者が認知症患者の老老介護では、強いストレスから介護者も認知症を発症する場合がある。

2) 全年齢人口に対する65歳以上の割合。



図3 計画敷地全体図



図4 食拠点立面図

## ハード的アプローチ

移動を促すために、道路に沿って連続する空間を提案する。道路に沿って設けた軒下のパブリックスペースは、地域動線を巻き込むように。この空間を日常的に歩行することで、高齢者(介護者と要介護者)の生活レベル向上を図る。また、地域住民や観光客の流動性が増し、高齢者の活動と接する機会を多く設けることが、活動の促進につながる。

歩道に隣接するように拠点を置く。デッキを設け、拠点への自然な流れを作り出す。内外をつなぐセミパブリックなスペースかつ、歩き疲れた時に休憩できる場となる。

拠点は4つに分け、各拠点にメインとなる活動を割り当てた。また、拠点には他の拠点の機能の一部を取り入れている。拠点同士の関わり合いが生まれ、拠点間移動のきっかけになる。

## まとめ

高齢化の進行により、老老介護問題は今後ますます深刻化する。本研究は、これを少しでも緩和するために人的ネットワークを活用し、負担を分散・解消する提案である。ワーキングレスパイトケアによる負担軽減とネットワークの構築、地域の動線と拠点利用者の動線を重ね合わせて生まれる交流、連続性が促す移動によって身体能力の向上をねらう本案が、老老介護問題に対するひとつの切り口となれば嬉しく思う。



図5 支柱による連続性



図6 アプローチと休憩のデッキ

出典 図1: 和歌山県 HP(<https://www.pref.wakayama.lg.jp/>)、国土交通省 HP(<http://www.mlit.go.jp/>)  
統計ラボ(<https://ecitizen.jp/>)、e-stat(<https://www.e-stat.go.jp/>) のデータを元に作成。